

「ささえ」

2010年1月発行 情報誌 第30号

発行 NPO福祉用具ネット事務局

住所:福岡県田川市伊田4395 (福岡県立大学付属研究所 生涯福祉研究センター内)

TEL/FAX: 0947-42-2286

E-mail npo-fukusiyougunet@sage.ocn.ne.jp

HP <http://www10.ocn.ne.jp/~npofynet/enter.htm>

情報誌「ささえ」は年4回(1月・4月・7月・10月)発行しています。

印刷 よしみ工産(株) 北九州市戸畑区天神1丁目13-5

福祉用具はあなたの自立をささえます

あなたのささえがNPO福祉用具ネットを元気にします

床ずれ防止ハイブリッドエアマット「ピーウェーブ」

P-Wave



介護保険貸与対象商品

本製品は福岡県産炭地域
振興センターの助成を受け
て産学官で共同開発した
商品です。

特長

床ずれが一番発生しやすい腰周り部分だけが膨縮するエアマットタイプ。
部分的なエアマットなので浮遊感が少なく寝心地がとてもよい。



特定非営利活動法人
NPO福祉用具ネット

「大切な芽を皆さんのやさしさに包まれながら育んでいきたい…」

在宅での生活は継続できるのか？

NPO福祉用具ネット理事長 豊田 謙二 (熊本学園大学教授)

わが国の介護保険制度においては、介護給付 (=介護サービス) は三つの類型で構成されている。第一類型は在宅介護サービス、第二類型は施設介護サービス、そして第三類型が地域密着型サービスである。周知のように、この3つの類型の制度的根拠は、2006 年から開始された改正介護保険法に基づいている。

ところで、「要介護者」はどのように定義すればいいのだろうか。それは、要介護認定の判定に従えばいい、という回答が返ってくるであろう。では、介護保険を利用しなければ「要介護者」、あるいは「要介護」はどのように定義されるのか。それは介護保険の準用になるのだろうか。私が問いたいのは、介護保険制度を前提として要介護者を定義しようとする、介護されるべき人に介護サービスが届かない不都合が生じる、といったいのである。

つい最近のこと、熊本市の南、御船町のある地区の公民館でまち起しの会が開かれ、その議論に参加した。地区の小学校が廃校になりその活用のための集まりであった。この種の課題は、人口減と高齢化に直面する山間部では、どこにでも見られる共通の悩み事であって、決して珍しい話ではない。私がこの地区で問題視しようとしているのは、介護する人なしには要介護者は存在しない、という点なのである。この現実はいささかわかりにくい。丁寧に説明したい。

介護保険制度に話を戻そう。介護保険では介護保険料を納め、要介護認定で要介護の判定が得られれば、ケアプランの作成を基に介護サービスが受けられる。実は、「要介護」はその要介護認定で初めて定義されるのである。つまり、介護します、という保障が定まって初めて、介護されることが計画に入るのである。

御船町での当該地区の世帯は約150戸、人口は400人である。高齢化率は約50%、地区に住む人の半数以上は65歳以上というわけである。まち起し会では、近隣に設置されている介護サービス事業所の職員も参加していた。この地区に介護サービス事業所は設置できるのか、その事業所代表は、この地区での設置は不可能という。高齢者が多くニーズは高いのに事業は成立しないからだという。とすれば、介護保険料を納めているこの地区の高齢者は、介護サービスを受けたいと申請しても、「介護サービス」はないことになる。

なぜ、この地区で事業が成立しないのだろうか。金銭的な意味の「事業収支」では事業は成立する、と私は見る。ただし、急速に高齢化の進む地区のなかで、「介護サービス」だけでは事業所は孤立する。つまり、継続的な生活があってこそ、「介護サービス」が生活支援としての意義を持つからである。

介護ニーズを持つ高齢者が沢山いれば、介護サービス事業所が先を争ってその地区に進出するわけではない。とすると、ケースによっては、介護サービスを求めて隣まちに移住することも不可避となる。介護を求めて流離う難民、いわゆる「介護難民」づくりである。繰り返そう、介護者が要介護者を定義づけるのである。換言すれば、現行の制度下では介護者がなければ要介護者、つまり介護されたい人が存在し得ないのである。

介護保障の議論は、要介護者からの視点からではなく、介護者の視点、つまり介護者づくりから積み上げなければ要介護者が成立しない。過疎で、高齢者が半数を占める地区において、改めて介護者不在の介護政策、という不作為を痛感したのである。

謹賀新年

新しい年を迎えました。こうして「ささえ」の原稿を書きながら、皆さん方のお顔を思い出します。本情報誌は30号の区切りを迎えました。そのことを事務局長大山さんの指摘で初めて自覚した次第です。続けることの重要さとしんどさ、その大変さを大山さんに担っていただいています。改めて感謝申し上げます。

皆様にとって良い年でありますよう、心より祈念し、またお会いできる日を楽しみにしております。

理事長 豊田 謙二

足と靴の相談室(シリーズ5)

～歩くと足の裏が痛い 開張足～

福岡県立大学附属研究所生涯福祉研究センター 助手 中藤広美 (NPO福祉用具ネット理事)

皆さんの中には、長く歩いたりさらにはちょっと歩いただけでも足の裏が痛くなる方はいませんか？ 写真1



写真1

の○で囲んだ部分の裏側辺りになります。さらに、そこにタコやウオノメはできていません。

また、まっすぐに立って足元をみると左の図の丸で囲んだ中のようになんだか指の付け根の部分が、ぺた～っとなっていたり扇のように広がって見えませんか。

このような場合は、足が開張足という状態になっていることが多いです。開張足になると前述の症状や外反母趾、内反小趾になりやすくなるとも言われています。皆さんの足は大丈夫ですか。



図1

ところで ? 開張足ってな～んだ？

図1の黒く塗られた部分、すなわち5本の中足骨の間隔が開いた状態をいいます。これはどうやら、中足骨をつなぐ靭帯や筋肉が弱くなったためそのような状態になっているようです。このような場合、足と靴の相談室では、2つの対応策をご提案します。その提案の一つは体操です。

その体操とは、足の指をじゃんけんの「グー」にしたり「パー」にする運動で「グーパー」体操といえます。他にも、体操はありますがひとまずこの「グーパー」体操を毎日してみませんか？弱くなった筋肉が鍛えられ開張足が次第に回復してきますヨ。

なお、この体操は筋肉トレーニングですのでゆっくり行ってください。例えば、「グー」をしたまま5秒間停止しその次に「パー」をして同じく5秒停止。これを5セットほど毎日行ってみてください。

開張足の対応のもう一つの方法は、靴やフットベッドによる対応です。これには「足のアーチ」や「アーチサポート」というキーワードがあります。次回

回は、この「足のアーチ」と「アーチサポート」についてお話をさせていただきます。



図2

福岡県立大学附属研究所 生涯福祉研究センター 足と靴の相談室 案内「体操、歩き方」より

新製品紹介コーナー ～N01～
自動採尿システム【尿吸引ロボ ヒューマニー】について

NPO福祉用具ネット 事務局 大山 美智江(看護師)



尿吸引ロボ「ヒューマニー」ってな～に！

- ・ 専用の尿吸引パッドに内蔵されたセンサーが排尿を検知し、尿を瞬時に自動吸引します。タンク内にたまった尿は簡単にトイレにすてることができます。つまり、オムツと吸引器が合体したものです。
- ・ 介護保険対象品ですので本体は特定福祉用具購入助成の対象品として、在宅向けは一割の自己負担で購入できます。

今回は、ユニ・チャームヒューマンケア(株)より発売された尿吸引ロボ「ヒューマニー」について紹介させていただきます。この製品の開発段階よりNPO福祉用具ネットとして実用モニター試験に何度か関わらせていただきました。

看護師の立場から本製品に期待できることを以下のように考えています。

- ① おむつ交換の回数を少なくする → 介護者の支援(介護者の負担軽減)や要介護者の排泄に対する心理的負担の軽減が図れる。
- ② 排泄状態の客観的把握がより可能となる。→ 尿量や時間、尿の色などから得られる情報等によって排泄ケアの見直しや全身状態の管理をサポートする一助にもなる。
- ③ おむつ内のお肌の環境を快適に保つことができる → 尿汚染によるスキントラブルの予防と軽減(床ずれやオムツかぶれ等)が図れる。但し、日々のスキンケアを十分に行なった上での装着であることが前提。私の検証においては数例の検証で仙骨部への尿の付着を軽減でき、床ずれを改善することができた。
- ④ 自立支援とQOLの向上に繋がる → 要介護者の生活行動の拡大支援ができる。(車いす用の専用キャリングケースを使えばレクや外出などオムツをしたままでも出かけられる ⇒ 高齢者は外出時にオムツ交換の場所が少ないという課題がある。)、肌の爽快感、オムツ外し、パッドの当て方の工夫によってよりすっきりとしたオムツの当て方にも繋がる。

その他、活用の仕方次第では、⑤環境問題 ⇒ オムツ資源の削減、⑥経済効果 ⇒ 夜間のおむつ交換のための訪問介護サービスの軽減や個人のオムツコストの削減、⑦治療手段への利用 ⇒ 非侵襲的な手段として排尿管理にも応用(カテーテル留置の代替品)などが考えられます。

但し、ヒューマニーは適切に装着することが大切です。決して安易に手抜き介護を推奨するものではありません。まずはこれまでのおむつ内の「びっしょり・ぐっしょり」を少しでも補う程度の気持ちから使用してみたいかがでしょうか？最初から完璧な装着は無理と考えた方が良いでしょう。少しずつ取り扱いに慣れてくれば「より確実に効率的な使い方」ができるようになると思います。

排便との調整や男性の装着方法などまだ課題もありますが、使う対象者の条件はみんな異なります。介護者の状況や要介護者の身体状況など現場でいろいろと工夫して使われることをお勧めします。

本製品の詳しい情報はユニ・チャームヒューマンケア(株)のホームページをご覧ください。

情報誌「ささえ」の30号の発行に際して

事務局 大山 美智江

平成14年11月1日に特定非営利活動法人の認証を受けて8年目を歩いている「NPO福祉用具ネット」です。情報誌の第1号は平成14年11月20日に発行しています。「とにかく情報を発信すること、完璧な情報誌でなくても良いではないか」と松尾理事から促されてスタートしました。初めての情報誌はA3で両面印刷合計4ページでした。どのくらい印刷したのか覚えていません。

第2号は平成15年1月に発行しています。情報誌としての名前を「ささえ」と決定し、NPO福祉用具ネットのロゴマークも制定して印刷がされていました。このマークは九州日立マクセル(株)のデザイン部の明石様のご協力でできたものです。「ささえ」という名前も多くの人にささえていただいているこの言葉をそのまま取り入れたものです。表紙のレイアウトは福祉用具のベッドと車いすのイラストを配置しました。全8ページと決めて編集をしているのですが、素人の私の編集ですから書体も不揃いでとても恥ずかしい仕上がりとなっています。特に第2号の発行に際してはとても大変な思いをしました。全8ページを印刷してホッチキスで閉じる作業を自分たちで行ないました。A3の用紙にどのように配置し印刷したらページが繋がるのか悪戦奮闘して作ったことを昨日のことに覚えています。もう一つの苦労は印刷したものを折りたんでホッチキスで中を閉じる作業でした。そんなホッチキス(中心部を綴じる)が存在することをこの時始めて知りました。幸いにお正月やすみでしたので一部の理事に手伝っていただきました。500部もの印刷をして綴じる作業の大変さを痛感して、この人件費はお金に換算するととても高い情報誌となるということを実感したので第3号からは印刷業者をお願いをすることとし、現在に至っているわけです。NPOの内情を理解していただき今日まで印刷を引き受けていただいている北九州市のよしみ工産(株)様にとても感謝しています。苦しいNPOの運営状況を理解していただき団体会員としてもご賛同していただいています。お陰様で、第3号は平成15年4月にピンク色の立派な「ささえ」として発行できました。

これまでのすべての「ささえ」を、事務局では数部ずつ保管しています。編集において、たくさんの失敗をしながら今日の30号を迎えている訳です。こうして改めて振り返ってみますとこれまでのNPO福祉用具ネットの歴史がよく解ります。懐かしくもあり、少しずつですが編集技術も上達したのではないかと思います。

もう一つの問題は情報誌を印刷し郵送するための経費の捻出でした。当初は企業の宣伝コーナーを設けて掲載費用をいただいて経費に充てるということでしたが、僅か500部の印刷部数にそれほど賛同してくれる企業や事業所はなく、当初の数回のみに実現しただけでした。その後は他の諸経費を削ってでも情報誌を発行することはNPOの活動を外部に向けて発信することにもなり、重要事項と位置づけて継続することにしました。とはいっても年に4回を継続することは大変なことです。事務局がどんなに頑張っても原稿を書いて下さる方がいなければ発行はできません。事務局からの原稿依頼に快く応じてくれ、それぞれとてもお忙しい中で毎回の原稿を提出して下さった関係者の皆様に心より感謝しております。

私にとっては、これまでの情報誌「ささえ」は人生の宝物でもあります。たった1枚の印刷物にもそれを作った人の想いがあるということを改めて実感し、NPOの事務局の仕事を通してたくさんの気づきをさせていただきました。

時々、「ささえ」から発信した情報について問合せのお電話があります。また、展示会等で全く知らない方からも感想をいただいたこともありました。「福祉用具の開発に王道なし」のコーナーはとても面白いですね。毎回楽しみです」など、こんな反響はとても嬉しいです。

これからも愛情を込めて発行を継続したいと思います。皆様の温かいご支援とご協力を何卒よろしくお願い致します。(これまでの情報誌「ささえ」の内容は、NPOのホームページで全てご覧いただけます。)

＊ 今、思うこと。「福祉用具の開発に王道なし」(その21)は筆者(坂田理事)の事情にて今回はお休みさせていただきます。次回にご期待下さい。

という訳で、急遽大山が代筆することになりました。これまで坂田理事などとともに開発に関わった仲間として開発者達の姿を身近に見てきた事務局の立場で開発相談に視点を当てて書きました。

坂田理事のように楽しい文書は書けませんが…。できるだけ、標準語で書きたいと思います。でも…話をさせるとやはり私は田川弁らしいです。

～ものづくりに携わって～
開発相談を受ける大山の立場から

NPO福祉用具ネット事務局長 大山 美智江

これまで受けた開発相談

医療現場の一看護師の私が「ものづくり」に参画したのは平成10年の福祉用具研究会の活動から始まった。

これまでにNPOとして相談を受けた福祉機器や健康機器も振り返ると多岐にわたる。介護に関するすべてのもの…、例えば、高齢者のおもちゃ、リハビリに関するもの、介護支援システムに関するもの、離床センサー、生体検知システム、補装具、介護用衣類、介護支援ロボットに関するものからベッド、車椅子、歩行器、床ずれ防止用具、体重計から段差解消機、排泄関連用具…などである。

相談の経緯は県開発センターや大学のコーディネーターからの紹介や企業からの直接相談である。

製品化されたものには、ご存知のようにNPO福祉用具ネットが助成金を受けて開発したもの、床ずれ防止用具P・Wave、洗髪シャワー・介護シャワー・ボックスシートである。最近発売された自動採尿システム尿吸引ロボヒューマニーも開発に際して実用モニター試験などで協力をした製品である。完成しそうでなかなかできないものもある。坂田理事がこのコーナーで以前に紹介した座位で測定する車いす用体重計や昇降用いすである。試作品までいったがまだ製品化には至っていない。現在、製品化を目指している製品もいくつかある。

開発品の条件

この10年あまり、ものづくりの世界を内側から覗いてみて思うことは、「ものづくり」＝開発の苦勞である。アイデアを具体化することの大変さである。ましてや福祉機器等は日常的な道具とは異なり、使う人の身体機能が大きく影響する。

どんな身体機能の人が使うものなのか、
それを主に操作する人は誰になるのか、
どんな場所で使うのか、何時使うものか、
頻度はどのくらい使うものか、
回りの家族などへの影響はないのか、
家族形式はみんな違うがその影響は、
誰でも安全に使えるものか、
万が一の心配はないのか、
コスト負担は、
制度は活用できるのか…など、

これらユーザーの立場からの課題をクリアしても企業としては当然のことであるが採算があわない「ものづくり」はできない。

どの程度の市場があるのか、金額と数の試算で製品化することは極めて重要となる。どんなに困っているユーザーがいてもボランティアでの「ものづくり」はむづかしい。

そんな開発側の事情をこれまでたくさん目のあたりにしてきた。

ものづくりの世界＝プロジェクトX

安全で確かなものづくりのために毎夜遅くまで開発者が挑戦している姿も知っている。休日出勤も当たり前の世界。開発品に完璧なものはない。日々進歩している。これで終わりという開発はない訳である。例え、一旦世に産み出した後もユーザーの声に耳を傾け、細部にわたり改良・改善を目指して努力している実情も見えてきている。

緻密で地味な仕事…。ひとつひとつ改善や改良を繰り返しながら問題解決をした時の開発者の誇らしげな姿は仲間としてとても嬉しく、そして頼もしく「素晴らしい人たち」と敬服する。

これまで、医療という現場の限られた専門職しか知らなかった私には、そんなものづくりに関わる人の姿はとても新鮮であった。まさに以前にテレビで放送された「プロジェクトX」の世界である。ものづくりの世界にはこの大小にかかわらず、開発品すべてに於いて同様の「物語」があるということを改めて感じる。

ひらめきから製品化への実現に至るまでの長いみちのり、それが会社組織として動き出すということ、試作から検証、市場調査から製品化決定、品質管理から販売戦略など企業の動きを垣間見て、私は私達の身の回りにある製品を見る目も変化してきたように感じる。

医療現場しか知らなかった私がこんな世界に足を踏み込むとは思ってもいなかったことである。

ものづくりでの産学官連携の必要性

もうひとつ、ものづくりをささえるということで大学の研究者という存在も不可欠なパートナーであることもよく分かった。

研究成果は開発の裏側にその手引書となり、技術そのものに活かされたり、さらに応用技術として活かされていることが理解できた。また、製品評価に際しても各々の研究分野において、より専門的な見地から開発助言をいただくということは、ものづくりを確実なものへと導くものとなることも、共に関わっていく中で理解したことである。

つまり、産学連携がとても重要なキーワードであるということである。

私達のものづくりでは、特に福岡県工業技術センターの役割は大きく、官という立場からのバックアップも貴重な存在であり、たくさん助けていただいた。そんな意味から考えると正にものづくりの成功の秘訣は「産学官の連携」のあり方にあるのかも知れない。

NPO福祉用具ネットの果たした役割とは

これまで、NPO福祉用具ネットはそれらをコーディネートする役割を担い、隙間を効率よく繋ぐ役割を果たしてきたように思う。

企業・大学・県の開発支援・それらをコーディネートする場所、福岡県には飯塚研究開発センターなどがあるが、福祉機器のものづくりについては私達NPO福祉用具ネットの果たした役割はとても大きいものであると思う。

在宅・施設の介護現場を多く知るネットワークがあるからである。

これからも、福祉機器分野におけるものづくりにおいて、NPO福祉用具ネットが期待に沿える役割を果たしていけるように、さらにネットワークを拡大するキーパーソンになることが事務局の大山に求められていると自覚している。

これからも皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

事務局からの報告 (担当 大山 美智江)

10月から12月まで3ヶ月間の主な事務局の動きをご報告します。

- ・第36回東京国際福祉機器展の動向調査
(9月29日～10月1日 東京ビックサイト開催)
- ・第25回日本義肢・装具学会学術大会での筋電義手に関する情報収集
(10月31日～11月1日神戸市国際展示場)
- ・久留米市九州ホームケアサービス(株)にて、尿吸引ロボヒューマニーの説明 (11月2日)
- ・健康・介護セミナーにて離床センサーについての説明
(11月6日飯塚研究開発センターにて)
- ・川崎町地域福祉セミナー 共催事業
(10月10日、11月14日、12月12日に開催)
- ・筋電義手開発会議
(10月26日九工大、11月9日佐賀大、12月21日九工大)
- ・福祉用具研究会開催、(10月16日、11月17日で合計7回シリーズが終了)
- ・福祉住環境コーディネーター協会見学会引率
(12月19日佐賀大学)
- ・西日本国際福祉機器展出展に関する企画・調整等の業務

■ 西日本国際福祉機器展に出展。11月27日～29日

＊展示会のようすの写真をホームページに掲載していますのでご覧下さい。

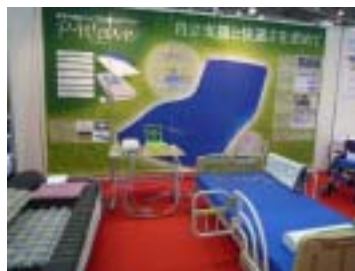
＊ブース内でのセミナーを一日4回開催。たくさんの皆様が聴講された。



移乗技術「トランスファーボード・スライディングシートの使い方」 山形茂生講師



「床ずれ防止用具の選び方」 松尾清美講師



出展品

共同開発品 [P・Wave] [4月発売予定 P・Wave Mini]

その他、洗髪シャワー・パシーマ製品・筋電義手試作品など

■ 自動尿システム 尿吸引ロボ ヒューマニーが11月より九州地区で発売開始 (西日本福祉機器展にも出展)



NPO福祉用具ネットが開発協力をした「尿吸引ロボ ヒューマニー」がいよいよ発売開始となりました。

「ヒューマニー」使用についてのご相談はNPOの事務局でもお受けいたします。



＊今回の西日本国際福祉機器展出展に際してご協力いただいた、別府リハビリテーションセンター様、佐賀大学松尾清美先生、龍宮様、九州日立マクセル様、福祉SDグループ様、木原鉄工所様、ユニ・チャーム ヒューマンケア様、三電様、シーホネン様、理事朝比奈様、会員山本恭子様 に心より感謝申し上げます。

■ 平成22年度新会員を募集開始!

会員となっても一緒に活動をささえていただけませんか?

個人会員 入会金 1,000 円 年会費 4,000 円

団体会員 入会金 2,000 円 年会費 30,000 円

賛助会員 1口 3,000 円以上から

お問合せは事務局まで。

■ 福祉住環境コーディネーター協会主催見学会情報

次回、3月12日 総合せき損センター見学

■ お問い合わせ

＊次年度の事業企画に関して、皆様からの新しい企画のご提案をお待ちしています。

＊会員の継続手続きも開始します。皆様のご支援を引き続きよろしくお願いいたします

また、新しい会員の御紹介も是非お願いいたします。